



「三原市大和文化センタークレオホール」でのクリスマスコンサート（小・中・高合同聖歌隊）

やまびこ 2019



「あれも、これも」

平成生まれの中高生にしてみると、昭和＝古い、古いので逆に新しい、という感覚のようだ。たとえば、彼らにしてみると、カセットテープやラジカセなどはあまり目にしたことが無いので新鮮に感じるようだ。

昭和生まれにしてみれば、自分が古物あつかいされているような、微妙な気分になる。しかし、平成も今年で終わりだ。いつかは彼らも、平成＝古い、と思われるようになる。そういう時代が平和の内に来ることを願う。

「学び」とは果たして何なのだろうか、と自問自答することがある。昔は親が農家だったらお百姓を、鍛冶屋だったら鍛冶職人を目指し、小卒くらいで家業を手伝い、そして立派に独り立ちすればそれでよかった。学校など行かなくても「生きた学び」を生活の中でしたのだ。

これに対し、今は社会に出るまでの学びの時間が長く、また求められるものも多岐にわたる。ここ最近では、教育界も偏差値教育一辺倒だった昭和時代の名残りから抜け出そうと、教育改革を押し進めることに余念がない。それを受けて私学も公立校も様々な変化に対応するのに必死だ。

生徒達は、思考力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力、メタ認知能力、問題解決能力など、今までの学びの上に、更にこれらの、一言で説明することのできないようなスキルを身につけるようにと、迫られる。簡単に言うと、「学力」と同時に「人間力」も学校が教えなければならない時代なのだ。どうも、「あれも、これも」といったように思え、それでいいのだろうかとも考えさせられる。

しかし、よくよく考えてみると、言い方は良く無いが「あれも、これも」は三育が行う全人教育の特徴だ。これをずっとしてきている。偏差値、偏差値と言われた昭和の時代においても、寮に住み、畑に出て作物を作り、学校を清掃し、奉仕活動に参加し、音楽活動を行い、伝道活動をしてきた。聖書の教え、祈り、学び、働きはいつも学校の中心にあり、それを取り囲むように教科や活動が配置されてきた。これは今も変わらない。

社会の学校に期待する教育観が、三育教育に近づいたともいえるだろう。しかし、大きな違いは、私たちは神様を中心としている。人間の計画を成功させるためのキリスト教教育ではない。神様の計画を実現するための「人物」を育てるのが、三育教育だ。2019年もそれを大事にしたい。

祈り、学び、働きつつ前進。

校長 田淵 裕

